Niigata University

24 FLAIR 画像が有用であった超急性期くも膜下出血の1例

高畠 靖志・宇野 英一・若松 弘一
山崎 法明・土屋 良武
福井県済生会病院脳神経センター
脳神経外科

症例は85歳の女性．前夜9時頃，風呂上がりに急に肩から後頭部にかけて押さえつけられるような痛み出現し午前3時頃まで続いた．朝になっても頭重感残るため来院．項部硬直をはじめ明らかな神経学的異常なし．頭部CTでは陳旧性梗塞以外には異常なし．同日のMRIではFLAIR画像においてbasal cisternがはっきりせず，くも膜下出血を疑い腰椎穿刺を行ったところ血性髄液を認めくも膜下出血と診断した．右内頸動脈に3mmの脳動脈瘤をみとめ，clipping術を行い，約1か月後に独歩退院した．急性期の血腫がFLAIR画像で高信号を呈することは知られている．CTでくも膜下出血がはっきりしない場合には髄液検査がgold standardであることは論を待たないが，侵襲を伴うため，FLAIR画像が有用であることが示唆された．

25 基底核部胚細胞腫の臨床的特徴

杉山慎一郎・齋藤 竜太・金森 政之
山下 洋二・隈部 俊宏・冨永 悌二
東北大学大学院神経外科学分野

【目的】基底核部胚細胞腫の臨床的特徴を検討し，診断の問題点を考察する．

【対象】1985～2005年に加療した基底核部胚細胞腫14例を対象とした．病変は片側性11例，両側・多発性3例であった．病理診断は13例で得られ，胚腫9例，胎児性癌1例，悪性奇形腫1例，混合性胚細胞腫2例であった．

【結果】受診時，錐体路障害を11例，思春期早発症を4例に認めた．発症から治療開始までに平均17.3（1-49）ケ月を要していた．初回画像検査で診断に至らず，長期経過観察された症例が4例存在した．入院時MRIにて，12例は胚細胞腫に典型的な所見を呈したが，2例はT1強調画像でわずかな高信号を認めるのみであった．

【結論】軽度の錐体路障害や思春期早発症を認めた場合，基底核部胚細胞腫を積極的に疑い早期にMRI撮影を行うこと，基底核部のわずかな所見を見逃さないこと，間隔を詰めた追加画像診断，が早期診断のポイントである．

26 小脳に原発したpure yolk sac tumorの1例

北澤 圭子・佐々木 修・中里 真二
鈴木 健司・高尾 哲郎・小池 哲雄
渋谷 宏行*
新潟市民病院脳神経外科
同 病理部*

頭蓋内原発のyolk sac tumorでは，純型はまれで，他の組織型に合併してみらることが多い．また，germ cell tumorの多くが松果体部や鞍上部に発生する．今回我々は，小脳に原発し，他の組織型を合併しなかったyolk sac tumorの1例を経験したので報告する．症例は4歳男児，生来健康であった．嘔吐，食欲低下で発症し，数日間で歩行障害と傾眠傾向が出現したため当院小児科を受診した．頭部CT上，右小脳半球に4cm大のenhanced massを認め，当科に入院し腫瘍摘出術を施行した．組織は，AFP免疫染色陽性で，hyaline globuleとSchiller-Duval bodyを認め，典型的なyolk sac tumorであった．また，MIB-1陽性細胞は90％以上であった．術後2週間で頭蓋内，脊髄に播種を来たし，ICE療法3クールと脊髄の病変に対し局所照射20Gyを行った．一時的に腫瘍のコントロールは良好であったが発症後5ケ月後に新たな頭蓋内播種を認め，現在全脳照射中である．

NII-Electronic Library Service